

障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援（ ）

- 就労支援モデルの検証の試み -

小林菜摘 四ノ宮美恵子 深津玲子
 (国立障害者リハビリテーションセンター)
 就労移行支援 就労支援モデル 体験学習

【目的】

国立障害者リハビリテーションセンターで実施した「青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業（以下、モデル事業）」では、「施設内訓練」「行事参加」「職場実習」の3つの体験場면을支援のフィールドとし、「働くために(就労)」という統一した支援の文脈設定のもと、「自己理解」「他者理解」「社会的規範の理解」を体験的に理解することを下位目標とした、らせん状の支援プログラムを試行してきた。それらを、障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援の1モデルとして考案した。本研究では、事例検討による就労支援モデルの有用性を検証することを目的とした。

【方法】

(1) 事例概要

モデル事業利用者 A。男性。20代前半。DMS- による診断名は、特定不能の広汎性発達障害で、WAIS- の結果はVIQ=96、PIQ=79、FIQ=87であった。また最終学歴は大学卒業で、アルバイトを含む就労経験を有していなかった。

訓練開始時においては、就労を希望するという発言はあったものの、就労への動機付けを持っていなかった。

(2) 手続き

就労支援モデルの検証にあたっては、利用開始から15ヶ月の支援期間を、表1のように支援における主たる体験場面の設定に沿って5つの過程に区分した。そして、訓練の一環として、一ヶ月毎に支援過程における振り返りを記述してもらった作文をもとに、各期毎の作文の記述から、単なる事実の記述を除外した語りを文章単位で抽出し、KJ法の手順に則ってカテゴリー化した。(グルーピング、カテゴリー化に関しては、支援場面に関与していない心理職に依頼した。)

なお、個人情報保護のため、事例の特性を理解する上で支障のない範囲で、個人が特定されるおそれのある記述については修正を加えた。

表1 支援過程の区分

区分	期間	主な訓練内容
第1期	0ヶ月～3ヶ月	アセスメント 施設内訓練(個別)
第2期	4ヶ月～8ヶ月	行事参加
第3期	9ヶ月～11ヶ月	職場実習(3回)
第4期	12ヶ月～13ヶ月	施設内訓練(グループ)
第5期	14ヶ月～15ヶ月	就職活動

【結果】

手続きに示した手順に従って、作文から単なる事実の記述を除外した語りを文章単位で抽出した結果、語りの総数は109個であった。それらは、表2のようなカテゴリーに統合された。

表2 各支援過程において抽出されたカテゴリー

区分	カテゴリー
第1期	自己に対する過大評価
	他者に対する過度な要求
第2期	他者との受身的な相互作用
	他者への肯定的関心
	主観的事実と客観的事実の乖離への戸惑い
第3期	限定的な近未来への展望
	社会的規範の認知
	社会的基準に基づいた自己認識
	社会的対応の必要性の認識
	自己の成長への気づき
第4期	漠然とした自己の課題設定
	漠然とした将来像への言及
	体験から拡大した希望
	社会的規範の体験的学習
	他者との能動的な相互作用
	他者との意志疎通の困難さへの言及
第5期	内省
	具体的な自己の課題の設定
	自立への言及
	自己の客観的評価
	就労に向けた自発的な課題設定
第5期	日常生活における自発的な課題設定
	自己の特徴への関心

【考察】

KJ法に則って作文における語りを分析した結果、本事例においては、支援モデルの下位目標である「自己理解」「他者理解」「社会的規範の理解」に関する体験的理解が得られたことがうかがわれた。

このことから、「施設内訓練」「行事参加」「職場実習」の3つの体験場面による支援を通して、社会的文脈における各下位目標に関して肯定的変化が見られたと考えられ、就労支援モデルの有用性が検証された。

さらに、支援事例を積み上げて、就労支援モデルの有用性の検証を行うことが今後の課題である。